

本論文は1925年に開館した東京市電気博物館と文部省の博物館政策の変化に関する論考である。電気博物館は、東京電燈（現・東京電力）からの寄付によって建設された電気研究所に付属した施設である。調査の結果、以下の2点が判明した。

第一に、電気博物館の開館時の展示と教育普及活動の内容が明らかになった。初代研究所長の鯨井恒太郎は、西洋の著名博物館を参考に、電気工学の歴史的系統的な発展過程を示すことを目的に展示を設計したが、1923年の関東大震災による資金不足のため、この計画は実現しなかった。それに代わり、国産の電気部品、電気製品、家電品などを入れ替えて展示した。加えて、工学者や技術者らの強い要望に対応して、電気の公衆理解を増進するため、展覧会を積極的に開催した。

第二に、1930年に文部省が博物館政策を変更してはじめて電気博物館が博物館として認知された。コレクションの概念を持たない電気博物館の展示スタイルは、明治大正時代の内国勸業博覧会の系譜をもつ陳列所から発展したものである。文部省は、陳列所は教育的でなく商業的であるとして、陳列所を博物館とみなさなかった。しかしながら、文部省は1930年に博物館政策を変更し、教育普及活動を活性化して全国各地の陳列所の博物館化を図った。その目的は、低予算で日本全土における博物館建設を促進することであった。このような背景の下、文部省は1933年に電気博物館を公式に博物館として認めた。